

教授

クリステン マリー サリバン

■ 学歴

1. 2013年 マッコリー大学（オーストラリア）修士課程 修了

■ 学位

1. 2013年 修士（応用言語学）

■ 研究分野

1. 応用言語学
2. 外国語教育
3. 日本学・日本語学

■ 研究キーワード

1. 留学、高等教育における国際化
2. 異文化コミュニケーション、異文化理解、異文化間能力の育成
3. ことばとアイデンティティ
4. 学習者アイデンティティ、学習者オートノミー
5. カリキュラム・デザイン、コース・デザイン

■ 研究課題

1. 日本と豪州の高等教育における国際化に関する政策および戦略の変遷と関係、日豪関係を背景にして両国の高等教育における国際化政策及び戦略、学術交流の在り方に関する研究
2. 留学の学習効果を高めるための取り組みの計画と評価、留学経験者の留学後のことなど、留学に関する研究
3. 異文化間能力の育成を目指すコース・デザインに関する研究
4. 外国語学習における自律学習能力・学習者オートノミーの育成を目指す実践的取組みに関する研究

■ 担当授業科目

1. 異文化間コミュニケーション I（前期）（英語学科）選択
2. エリア・スタディ I（前期）（英語学科）選択
3. 英語プレゼンテーション III（Aクラス及びBクラス）（前期）（英語学科）選択
4. 異文化間コミュニケーション II（後期）（英語学科）選択
5. 国際ボランティア演習（後期）（英語学科）選択
6. グローバル英語 II（Aクラス及びBクラス）（後期）（英語学科）選択
7. 日本語教育実習（通年）（英語学科、日本語教員養成）必須
8. 専門演習 I（前期）（英語学科）必須
9. 専門演習 II（後期）（英語学科）必須

10. 卒業研究（通年）（英語学科）必須
11. 人文学入門（1回）（前期）（人文学部総合人間科学）必須

■ 授業を行う上で工夫した事項

※ 助教・助手については、実習・演習等の指導を行う上で工夫した事項

1.	<p>授業科目名【異文化間コミュニケーションⅠ・異文化間コミュニケーションⅡ】</p> <p>異文化間コミュニケーションⅠ・Ⅱでは、異文化コミュニケーションにおける誤解や失敗を取り上げるケースについてのグループディスカッションと発表、体験型アクティビティ、視聴覚資料、外部講師による講義、振り返り課題などを活用して、異文化コミュニケーションの概念への理解を深める工夫を行った。異文化間コミュニケーションⅡでは、日本における多文化共生および英語を使った異文化コミュニケーション、多文化な職場における異文化コミュニケーションというテーマを設定することで異文化コミュニケーションについてより具体的に考える機会を取り入れた。</p>
2.	<p>授業科目名【エリア・スタディⅠ】</p> <p>CLIL（内容言語統治型学習）手法を用いて行う授業である。移民・多文化主義と先住民というテーマを通して様々な角度から豪州というエリアについて考えることができるよう授業を行った。様々な情報源や形の資料を活用することで学生の理解や関心を高めつつ、エリアを学ぶときの手法についても意識させるよう工夫した。また、授業で扱ったテーマを通して、そして授業で身についた手法を用いて、豪州をさらに知り、他の地域についても調べて考えることができることを意識させるよう課題設定の面においても工夫を行った。</p>
3.	<p>授業科目名【英語プレゼンテーションⅢ】</p> <p>通訳案内士に必要な知識および英語力を育成することを目標とした授業である。バイリンガル教材を活用して日本の地理・歴史・文化に関する知識を再確認しながら、それをどのように英語で伝えたら良いかを確認した。必要な表現力および知識をしっかり身につけさせ、応用できるようになることをサポートするためのアクティビティなどを工夫しながら授業を行った。</p>
4.	<p>授業科目名【国際ボランティア演習】</p> <p>カンボジアの幼児教育において活動しているチャリティ団体である TukTuk と協力して、PBL という形をとって、学生が主体的になってボランティア・プロジェクトの計画・実施・結果報告・振り返りが行えるよう授業運営を行った。ボランティア・プロジェクトの実施を通して、国際協力や世界の情勢について知識や意識を深めると同時に、チームワーク力、コミュニケーション能力、プロジェクト管理能力などのソフトスキルを向上させるよう授業運営を行った。</p>
5.	<p>授業科目名【グローバル英語Ⅱ】</p> <p>ビジネス英語スキルの向上を目指す授業である。ビジネス場面における電話でのやり取り、メールの仕方、売り上げや財務状況等の情報の説明の仕方を中心に、実践的な授業展開を図った。その中で社内と社外、インフォーマルとフォーマルの表現の仕方の違いに気付かせ、両方を練習する機会をたくさん取り入れた。</p>
6.	<p>授業科目名【日本語教育実習】</p> <p>日本語教員養成課程の最終段階として、実際に日本語学習者を対象に教壇実習を行い、今までに学んできた理論と実践の統合を目指した。前期では、オンラインツールを活用して海外に住む生涯学習者を対象にした教壇実習、後期ではアメリカのコミュニティカレッジに通う学生とのオンライン交流</p>

	<p>および北九州 YMCA での教壇実習を実施した。教案や教材、模擬授業等についてフィードバックをしっかりと行い、フィードバックの内容が次回に活かされていることを確認しながら指導を行った。一方で、学生のセルフリフレクションや学生同士のピアフィードバックや助け合い・チームワークを促すため、教員より前に本人やピアによる気づきやフィードバックの共有を必ず行ったり、すべての学生が率直に意見を述べられる雰囲気を作ったりするなど、日本語教員として求められる資質や能力が育成されるよう授業運営などにおいて工夫を行った。</p>
7.	<p>授業科目名【専門演習Ⅰ・専門演習Ⅱ】</p> <p>ゼミのテーマ（諸国の移民政策および多文化をめぐる教育の取り組みと課題）に対する知識を身につけさせながら、調べる力、批判的思考力、チームワーク力、計画力、プレゼン力などを育成させることを目的とし、ゼミの運営方法において工夫を行った。専門演習Ⅰでは、学生は毎回異なる役割で授業での報告に励み、毎回学生全員が発言してゼミに貢献できるよう工夫を行った。専門演習Ⅱでは、前期の学習を踏まえ学生が選んだ研究課題を中心にゼミを行った。毎週のゼミで進捗状況を報告させ、フィードバックを行いながら学生の主体的な学びをサポートした。その中で、現場の声を直接聞くことの大切さについて考えさせるため、北九州国際交流協会へのヒアリング調査や地域日本語教室へのボランティアの機会を企画、提供した。学習・調査の成果を発表する場として山口県立大学の教員と合同ゼミ発表会を行った。</p>
8.	<p>授業科目名【卒業研究】</p> <p>計画的に研究に取り組むこと、同級生の研究課題に関心を持つこと、同級生から学ぶことを大切にゼミ運営を行った。毎回の授業で学生一人一人にその週取り組んだことや研究の進捗状況などをクラスの前で発表させ、翌週の課題や計画を合わせて発表してもらった。それぞれの発表の後、フィードバックやアドバイスをを行った。クラスの前で発表やそれに対するフィードバックを行うことによって、お互いから学び合う機会をつくった。また、後期になって卒業論文の執筆やそれに対する一対一の指導が中心になってからでもゼミ生同士で支え合う、協力的な学習環境ができた。</p>

■ 学会における活動

	加入時期	所属学会等の名称	役職名等（任期）
1.	2005年9月～現在に至る	全国語学教育学会	
2.	2013年1月～現在に至る	大学英語教育学会	
3.	2013年9月～現在に至る	日本自律学習学会	
4.	2019年4月～現在に至る	留学生教育学会	
5.	2019年4月～現在に至る	オセアニア教育学会	
6.	2021年6月～現在に至る	言語文化教育研究学会	
7.	2021年7月～現在に至る	Japanese Studies Association of Australia	
8.	2022年6月～現在に至る	異文化間教育学会	
9.	2022年8月～現在に至る	日本語教育学会	
10.	2023年5月～現在に至る	大学日本語教員養成課程研究協議会	
11.	2023年6月～現在に至る	日本言語政策学会	
12.	2023年7月～現在に至る	オーストラリア学会	
13.	2023年7月～現在に至る	小出記念日本語教育学会	

■ 研究業績等に関する事項（2023年度）

	発行又は 発表の年月	著書、学術論 文等の名称	単著・ 共著の別	発行所、発表雑 誌等又は発表学 会等の名称	概 要
(著書)					
(学術論文)					
1.	2024.3	Discussions about Study Abroad and Student Exchange to Japan at Australian Universities in the Publications of the Japanese Studies Association of Australia: 1981 to 1997	単著	西南女学院大学 紀要, Vol. 28	① This paper surveys the early publications of the Japanese Studies Association of Australia (JSAA) with the aim of gaining an initial understanding of how student exchanges and study abroad to Japan came to be so prevalent within Australian universities. ② pp. 15-27
(翻訳)					
(学会発表)					
1.	2023.11	The Situation of Study Abroad and Student Exchange to Japan within Australian Universities in the 1980s and 1990s	単著	第 27 回オセア ニア教育学会 (於 群馬大学)	This paper aims to understand how study abroad and student exchange to Japan became so prevalent in Australia, and the conditions and circumstances which led to this, through an investigation of discussions about study abroad in the early publications of the Japanese Studies Association of Australia (JSAA).

■ 外部資金（科学研究費補助金等）導入状況（本学共同研究費を含む）

(1) 共同研究			
研究題目	交付団体	研究者	交付決定額

			○代表者（ ）内は学外者	(単位：円)
--	--	--	--------------	--------

(2) 個人研究				
	研究題目	交付団体	交付決定額 (単位：円)	備考
1.	Investigating Interconnections between the Higher Education Internationalization Policies of Japan and Australia	日本学術振興会	1,950,000 円	

■ 社会における活動

	任 期 期 間 等	団体・委員会等の名称 (内 容)	役 職 名 等
1.	2011 年度～現在に至る	全国語学教育学会年次国際大会 査読委員会	査読者

■ 学内における活動等（役職、委員、学生支援など）

	任 期 期 間 等	会議・委員会等の名称 (内 容)	役 職 名 等
1.	2022 年 4 月～2024 年 3 月	人事委員会	
2.	2022 年 4 月～2024 年 3 月	教務委員会	
3.	2022 年 4 月～現在に至る	国際交流委員会	副委員長
4.	2022 年 4 月～現在に至る	英語学科留学制度担当者：留学前・留学中・留学後のすべての段階において学生の支援を行うと共に、受け入れ先機関等と綿密な連携をとり、英語学科の留学制度の運営を行っている。	
5.	2024 年 3 月～現在に至る		教務部長代行